

令和2年度 アドバイザリーボード 議事要旨

1. 日 時：令和3年3月2日（火）15:00～17:00

2. 場 所：WEB開催

（事務局：国立研究開発法人日本医療研究開発機構 201 会議室）

3. 出席者：

（委員）藤原議長、相澤委員、阿形委員、志鷹委員、山口委員、
湯澤委員、渡部委員、福島委員代理、森委員代理

（事務局）三島理事長、城理事、真先執行役、難波統括役、阿蘇経営企画部長、
吉徳経理部長、岩本研究開発統括推進室長、浅野実用化推進部長、
野田国際戦略推進部長、丈達創薬事業部長、竹上医療機器・ヘルス
ケア事業部長、渡辺再生医療・細胞医療・遺伝子治療事業部長、水
野ゲノム・データ基盤事業部長、宮川シーズ開発・研究基盤事業部
長、町田革新基盤創成事業部長、野村経営企画部次長、釜井研究開
発統括推進室次長、大塚疾患基礎研究事業部疾患基礎研究課長 他

4. 議事

1. 令和2年度における研究開発の主な取組状況について
2. 理事長イニシアティブ（第1弾）について
3. 令和3年度医療分野研究開発関連予算（案）について

5. 議事の概要

事務局より開会する旨の発言があり、出席者の報告、三島理事長の挨拶の後、
議事に入った。

【議事1. 令和2年度における研究開発の主な取組状況について】

事務局より資料1を基に説明を行った。

委員からは、以下のようなコメントがあった。

○AMEDの良さとして、幅広く課題を取り上げているところにあり、6つの統
合プロジェクトはそれぞれがピラミッド構造になっていて、その上部に位置
するものが実際に病気の治療に貢献していくという構造であると認識して
いる。今後、統合プロジェクト毎に、ピラミッド構造がどのような分布にな
っているのかを示せば、疾患コーディネーターが戦略を立てやすくなるの

ではないか。また、各統合プロジェクトのピラミッド構造の上位に位置するものの中で、異分野交流に基づく議論を行うことで、国際レベルで日本のステータスが築けるような研究（医療の方法も含めて）が発展すると思う。

○高齢化社会を迎える中で、在宅ケアやヘルスケアへの広がり、デジタル化・システム化等が進むとともに、コロナ禍を契機に、産業の担い手がベンチャーや IT 事業者の参入が進むなど、医療機器分野においても非常に大きな変化のときを迎えている。医療機器分野の成長のためにも、AMED には、健康・医療戦略室と連携し、より戦略的なファンディングを期待したい。

○COVID-19 への対応のために多大な予算が措置されているが、国民の側には、例えばワクチンというと、海外で開発されたものを輸入することしか聞こえてこない。日本でのワクチンの開発状況について、ステージ毎の目標や達成時期、進捗状況、実現の可能性も含めて、国民に情報が行き渡るよう、広報に力を入れていただきたい。

○COVID-19 を契機として、わずか1年のうちに治療薬・ワクチンの研究開発が進み、既に現場で使用まで至ったものがある等、研究開発の環境や戦略、スピードが劇的に変化している。この経験から、他の様々な疾患の新薬等の開発においても、世界中で激しい競争が展開され、製薬業界や関連する業界においては、劇的な変化を視野に入れた取組が必要であると認識している。COVID-19 への対応においては、これまでの研究開発の常識とは全く違うスピードや規模で開発が進んだということで、そのノウハウを調査し、更に実例をどんどん取り入れることで、研究開発や実用化の加速に生かせるのではないか。

○補正予算等で COVID-19 対策が組まれているが、感染症対策のピラミッド構造が希薄だと感じざるを得ず、基本となるピラミッド構造の部分がなくて、スピード感を持った対応はできないのではないか。今からでも遅くないので、7つ目の柱として、感染症対策のピラミッドの基盤を作り、スピード感を持って対応できるようなシステム、体制を整えておくことが重要である。その上で、ピラミッドの上部を築き上げるといった体制をつくったほうがよいのではないか。

○民間のコマーシャルベースには乗らないことの多い小児科領域において、未来を担う日本の子どもたちに関して AMED の果たす役割は大きい。資料の「疾患領域に関連した研究開発の取組状況」に拠ると、小児科領域と重なり合う、

成育領域の取組状況は、採択課題数も予算額も最小だった。今後の大きな柱のひとつとして、成育基本法の施行も踏まえ、省庁の壁を越えた横断的な取組を含めた、小児科領域の研究開発促進を盛り込んでいただきたい。

【議事 2. 理事長イニシアティブ（第1弾）について】

事務局より資料2を基に説明を行った。

委員からは、以下のようなコメントがあった。

○イニシアティブ第1弾は、メリハリのある基盤整備を進め、産業界も含めて利用しやすい仕組みを作っていくということで、大変ありがたい。人材の育成について、先日、生物統計家育成支援事業の報告会があり、ここで、欧米と日本とで生物統計家等の臨床試験を計画、実施、結果解析、評価するために必要な専門人材に大きな開きがあるとの指摘があった。人材における差は、臨床開発の速度においても、日本が大きく遅れる要因にもなりかねず、データサイエンティスト、生物統計家等の人材の育成というのが喫緊の課題という認識を持っている。イニシアティブの第2弾以降も、ぜひ人材の育成に考慮して、進めていただきたい。

【議事 3. 令和3年度医療分野研究開発関連予算（案）について】

時間の都合上、事務局説明、質疑・意見交換は取り止めとした。

以上をもって議事は終了し、議長より閉会する旨の発言があった。